

第2部 学生、ラムダ委員に迫る！

～ラムダ委員と学生の座談会レポート～*

グループ



インタビューアー：北山創一朗さん

(北海道教育大学函館校)

参加者：伊藤一弘さん、木谷敏雄さん、春井満広さん（以上、ラムダ委員）、武藤一郎さん、大西達也さん（以上、アドバイザー）

Q 津軽海峡交流圏（青森県や道南）を拠点として活動していることについて。

結論から言ってしまうと、津軽海峡交流圏を愛し、津軽海峡交流圏をこれからも発展へと導いていこうと思っているからこそ、ここを拠点に活動をしているということであった。ラムダ委員は決して津軽海峡交流圏内出身の方々だけではない。圏外出身の方もいれば、北海道、道北地域の方々もいた。もともとは、各地元にいたのに、なぜ津軽海峡交流圏に魅力を感じたのか。それは、自身が展開する活動や企業の職務に従事するにあたって、「津軽海峡交流圏にしかない」魅力が発見できたからである。

なかには、津軽海峡交流圏に特別熱い想いをぶつける委員がいる。縄文ウェルネス博を展開する委員だ。自身が青森出身でふるさとをツーリズムで復活させていきたいから、またラムダ委員を通じてアクションとしてやるのが大切、活かせる場ができるからこそ活動に従事し続けるという。この地域の他とちがうところはとずばり聞くと、「各地の意見が生まれてくる、広がりが出てくる」と答えた。心を洗濯することが目的の縄文ウェルネス博は、海外の活動を参考に取入れたものだ。もともと短命県であった青森を再生することを目的に開始したこの活動は、今ではすっかり全国からやってくるお客様を始め大きな刺激を与え続

* 第2部は2022年11月9日に行われたラムダ委員と学生の座談会の内容を、参加学生がレポート形式でまとめたものとなっています。



け、医療とは違った形での「健康」を提供している。

また、第3セクター鉄道会社に所属するラムダ委員は次のように語る。「開拓された北海道。函館は青森によっている。第3セクター鉄道としてノウハウを得られる。交流が大事であって交流できることが誇りである。やりとりが形となっていくことが素晴らしい。」

それぞれの想いを胸に、交差する津軽海峡交流圏はまだまだ新しい価値と魅力の創出を目指しており、ここを拠点に活動を続けていきたいというラムダ委員の強い想いが伝わってきた。

Q ラムダ委員同士が集まって活動することによって実現できたことや一緒に活動することの良さについて。

様々な取組みをする中で、貴重な意見交換や新たな知見が広がったということが挙げられる。というのは、自身の専門領域だけでなく、「交流」をすることで自身の活動や思想、知見に刺激を受けている委員が多かったからである。ラムダ作戦会議は団体の長や企業の社員等、様々な立場の方々方が在籍するが、普段自分たちの知見だけで活動を行うことが多かったものの、この会議を通じて異なる視点を手に入れたという。たとえば、ウェルネス博は、4年間行ってきたが、この活動を続けてきて、青森が地元ではないラムダ委員の方に体験してもらうことで、貴重な意見が得られることもあった。

「交流がもっとできそうな雰囲気が出てきた。地域でのつながりや、活動を継続させることが大切」と語る委員がいた。出身地域こそ違うものの、一体感を出すことに意義があると感じている委員が多い。

また、ウェルネス博は、運動、休養、栄養の3つの健康要素を整えながら行う活動であるのだが、このうちグルメな委員が語ったのは「地元のお酒や、それと組み合わせるおつまみもおいしくて、、、」ということであった。普段地元の方が組み合わせることのないお酒とおつまみの採択をしていくこともできたらしい。栄養も健康要素であるこの取組みは、心の健康にも影響してきており、食を楽しみながらの新たな知見の獲得にもつながっていた。



以上のように「自身の常識にとらわれず」「現地に赴いて」「他者や他地域を理解し」「それをさらに活用できる方法についてともに考える」ことが可能になっていた。一人では不可能なものを可能にしたのはラムダ作戦会議の強みであるとメンバーは確信している。



Q これからの活動と、若い世代に対して伝えたいと思うことについて。

地元の産物を活かした活動の推進と若者の力の創出が必要と感じているという。特に若者の関心を集めることは至上命題であるとされる。たとえば、ウェルネス博は、心身共に心が和らぐ素晴らしい活動であったが、この魅力に若者は気がつけるだろうか。今のままではほとんど気づいていないと思われる。ウェルネス博には、経済波及効果があるのか、などといった根本的議論の本質なども含めて慎重に検討する必要がある。そこで、まずは勢いのある若者に盛り上げてもらうというのが合理的だと考えている。盛り上げるためにはまず現地へ若者に赴いてもらう必要があるため、その施策を考えるのが大人の責任である。ここで言う「若者に赴いてもらう」とは、「その地域を好きになってもらうこと」と同義であり、地域を好きになってもらう施策を考えることもまた大人たちの責任だということであった。

また、若者のSNS利用にも注目している。若者は近年Instagram、Twitter等のSNSを頻繁に利用している。数人の若者が現地を訪れ、そこでSNSを利用し拡散をするとさらなる波及効果が期待できる。これをラムダ委員は「アンテナ張って拡散する」と表現している。いわゆるインスタ映え等を狙うには、映えスポット等の設置を行う必要があり、その環境整備をしていくことも現地が抱える課題である。そこを訪れてみようという意識をいかに持たせるか、それが、これからどのように活動を発展させていきたいかという問いの大きな鍵である。日頃から現地に来てもらう努力をしていきたいと、ラムダ委員は語る。



グループ2



インタビューアー：松田 滯さん（弘前大学人文社会科学部）

参加者：外井亜希さん、三津谷あゆみさん、山内史子さん、
森 樹男さん（以上、ラムダ委員）、飛弾則雄さん
（アドバイザー）、氣田直樹さん（オブザーバー）

Q 津軽海峡交流圏（青森県や道南）を拠点として活動していることについて。

ラムダ委員の一人は、津軽海峡交流圏で活動している理由は函館出身ということもあってもともと縁があった。函館に住んでいたときは青森と函館はあまり変わらないと思っていたが、青森に来てからは青森の魅力をすごく感じている。特にとても衝撃を受けたのが食文化で、たとえば、函館では食べない菊を食べていることなど、青森はおいしいものがたくさんあることだと語ってくれた。また、方言についても衝撃で、函館は下北の言葉と似てると言われることがあるが、津軽弁とはまた別で同じ県内いろいろな言葉があることが魅力。故郷の函館にも貢献できることが津軽海峡交流圏で活動する良さであると感じているという。

また別の委員に津軽海峡交流圏で活動する理由を聞くと、祖先が青森から来たという人や、アイヌの人たちが使っていた言葉が青森にもあるという部分につながりを感じていて、私のルーツが青森にもあるのかなと感じ、この会議がすごく面白いからと語ってくれた。

Q ラムダ委員同士が集まって活動することによって実現できたことや一緒に活動することの良さについて。

一緒に活動することで実現できたことは北海道新幹線開業時のPR動画。動画の最後にはりんご娘にも踊ってもらって委員全員がつながってこういうことができるのはすごく面白かった。

また一緒に活動する良さは、人と力を合わせると一人ではできないことがたくさんできるし、一人で巻き込めない人も巻き込むことができる。これは、長年



やってきているという点も影響していると思う。

さらに、ラムダの委員の皆さんは「じゃあやろう」となるまでの話がとても早い。また、自ら汗をかく精神がみんなの中にあって言われなくても実践しているようなメンバーばかりだと語ってくれた。そして自分がラムダ会議に入った時はまちおこしとかの分野のそうそうたるメンバーばかりで函館から来たばかりの頃だったというもあり、緊張感があったが徐々になじんでいきいまでは気軽に発言させてもらっているという。

また別の委員も北海道出身であるが、北海道もおいしい食べ物が多いけれども青森も野菜などおいしい食べ物が多いことが魅力だと感じていると語ってくれた。そして、この会議に参加している人が皆さん何かしらの個性的ですごい特技を持っていて一つ一つのアイデアが普通じゃないから何を言っても必ず面白いことが起こるといふ。

Q これからの活動と、若い世代に対して伝えたいと思うことについて。

これから発展させていくというよりも続けていくことが大事だと思っているという。つまり、継続させることが新しく始めるよりも大変だと思っている。たとえばマグロ女子会の毎年秋のイベントもコロナの影響で2年ほどできていないなど、継続は難しい部分がある。ただ、私たちは諦めていない。今はリハビリ期間と捉えて少し休んでまた、羽ばたいていこうと思っているという。

また、個人的には1000日を目標に毎日ゴミ拾いをしてSNSにアップする活動をしているという。この活動は、量や場所にこだわらずとにかく毎日やるというチャレンジで、吹雪とか正直行きたくない日でも行っている。この活動はすごく反響があって函館やすずきのでやってくれる人も増えてきている。なので、このような姿を自分が見せることで若い世代の方にも何か感じてもらえたらと思っている。先生みたいな感じではなく、自然な私の姿



で感じ取ってもらいたいという。ただ、写真を撮り続けるというのも結構面倒くさいとこのラムダ委員は付け加えた。

さらにラムダ委員の方はみんなそうだと思うが、多分失敗を恐れてないのではないか。むしろ何か実行した結果で出てきたものをみんなで楽しんでいるように感じているという。

また別の委員は、コロナになって会議がオンラインになったので今はないが、ほんとは酔っ払い話からいろいろアイデアが生まれていったという。

若い世代はダイバーシティとかサステナビリティといった価値観が当然の世代で、学ばなくても理解している世代だと考えている。なので、そういった世代がこの冊子に関わっているのはそれを生かす良い機会である。また、デジタルコンテンツが生活の中にある世代でもあるので、若い世代の人たちにはとてもアドバンテージがあると思っている。そこにダイバーシティなどを取り込むことは若い世代の人たちが関わっているからこそできることであると思っている、と若い世代とラムダ委員と一緒に活動することで新しい活動が生まれる可能性について語ってくれた。



グループ3



インタビューア：中嶋優翔さん（北海道教育大学函館校）

参加者：後藤清安さん、紺野洋紀さん、奥平 理さん（以上、ラムダ委員）、神 重則さん（オブザーバー代理）

Q 津軽海峡交流圏（青森県や道南）を拠点として活動していることについて。

初めのテーマではラムダがなぜ青森県、道南地域といった津軽海峡交流圏を基盤にしているのかについて、理由や魅力について話し合われた。

そこで委員の方々から様々なお話を伺ったが、津軽海峡交流圏について共通しておっしゃられたことは歴史的に青森、道南地域は連携が深いということである。青森県と道南地域は津軽海峡という海に間を隔てられているもののその交流関係は古く、歴史を辿ると発掘された遺跡、土偶の類似点などから縄文時代まで遡ることができるようである。当時は船を使用し互いが地元で手に入られない品々の交換が活発に行われていたが、現代では学生同士の交流や2016年に開業した北海道新幹線（新青森～新函館北斗）を始めとした交通網の発達による影響、さらに浅虫温泉と湯の川温泉、未完成となってしまった大間線、戸井線といった観光資源の共通点などからより強固なものとなっている。以上のように津軽海峡に隔たれ一見交流が薄いように思われるが、青森・道南地域は歴史的に交流が深くさらに共通の観光資源が存在するため、ラムダは同区域を交流圏に置いているようである。

次にラムダの魅力であるが、ラムダの委員には様々な地域、役職に就いている人が所属しているため、交流を通して普段見慣れている景色や地域に秘められている歴史的な事柄といった教科書には載っていないディープな情報を手に入れることができる。

さらに津軽海峡を泳ぐイルカ、鬼伝説といった青森県内に暮らしていてもその地域に住んでいないと知らない、地域外の情報を得られるところが大きな魅力となっている。またこれらの情報は自分の知的好奇心を操られるだけではなく、地



域振興にも生かされる。地域を発展させていくためにはその地域にお金を落としてもらわなければならないが、その一つ的手段として地元の名産品を加工した商品の販売などがある。現代では物価の高騰によって商品に付加価値が必要になってくるが、その付加価値として背景や歴史を含めて販売することでより魅力的な商品になっていくようである。このように交流を通して地域の多様な情報・知識を得られるところも大きな魅力となっている。

Q ラムダ委員同士が集まって活動することによって実現できたことや一緒に活動することの良さについて。

2つ目のテーマでは、ラムダ委員同士が集まって活動することによって実現できたことや一緒に活動することの良さについて話し合われた。実現できたことに関しては、コロナ禍の中での活動が挙げられた。2020年頃から蔓延した新型コロナウイルスの影響はラムダの活動にも大きく及び、当初予定されていた全ての活動が制限されてしまうという事態に陥った。しかしこのような厳しい制限下におかれた中でも、何もしないのではなく、オンラインを通して活動が実現できた。この成果は熱意を持った人々が集まったからこそできたものであり、一緒に活動することの良さの一つとも言える。

また一緒に活動することに関しては他にネットワークの構築によるメリットが挙げられる。上述したようにラムダ委員には様々な役職に就いている人が所属しているため、活動の中で沢山の意見交換、交流が行われる。その結果、商売に関しては人々との交流を通して様々な商品を購入することが可能になり、これまで以上に商売の幅が広がっていくことや、意見交換を通して自分の知らない知識・



情報を得ることができ、地元の魅力に関する自分の手札を増やすことにもつながられている。

加えてこうした魅力を宣伝していくためにも、このような意見交換を通して情報や手札を増やしておくことは重要であり、その効果は観光客に満足度の向上といった地域振興にも好影響を与えるものとなってくる。



Q これからの活動と、若い世代に対して伝えたいと思うことについて。

最後のテーマでは、これからどのように活動を発展させたいか、また日頃の活動から若い世代に対して伝えたいことが話し合われた。ここでは活動の発展可能性として北海道新幹線の札幌延伸が挙げられた。新幹線開業後はこれまで津軽海峡交流圏から遠く離れていた札幌も時間的に身近な場所になり、より大きな経済圏の拡大や利用客の増加が見込まれている。しかし、途中駅となる青森、道南も人々が降りてまでも行ってみたいという程の魅力の発信がなければ通過されてしまう恐れがある。

このようなことを回避するためにも全国への魅力の発信が必要となるが、この情報発信の大切さが若い世代に伝えたいこととして挙げた。近年は身近な人が発信することで親和性、信用性が高いことから、テレビの情報よりもSNSが信用され、一人一人が情報発信をする放送局のような立場になってきている。一方で関西、九州といった西日本地域では、東北地方は食、文化といった情報が得られないために未開の地と捉えられており、東北地方が旅行先に選ばれない状況になっている。

青森県にはりんごやねぶた祭りといったメジャーなもの以外にも、酸ヶ湯、不老死温泉、下風呂温泉などといった多数の温泉が点在している他、普段当たり前前に思っている自然の景色も非日常を求めて旅に出たい都会の人々にとっては非常に興味をそそられるものになっている。新幹線札幌延伸後、未開の地と思われる東北地方を知ってもらい、より多くの人に訪れてもらうためにも、SNSを多用する若者世代を中心に魅力の発信が必要であると伝えられた。

